「家族や身近な人との絆を見つめなおす」

3年　M.T

私には、5年ほどまともに話していない人が家族の中にいます。それは、兄です。この約5年間もの間、私と兄がかわした言葉は、「ねぇ。どいて。」「ソース取ってくれる。」「うるさい。」くらいです。冗談だと言う人もいるかもしれませんが、本当にこれが今の私と兄の会話なのです。友人から兄弟の円満な話を聞くたび、さらには年賀状の家族写真や、兄弟写真を見るたびに、「ああ。どうして私達はこんな関係になってしまったのだろう。」と悲しくなるのでした。自分でも、兄とどうしてこんな関係になってしまったのか、何が発端だったのか、よく分かりませんでした。だから今回はこの感話を通じて考えていこうと思います。

私と兄は歳が四つ離れていて、現在兄は大学一年生です。私と兄の仲が悪くなり始めたのはきっと、私が小学校三、四年生くらいからでしょう。原因は母と私の喧嘩だと思います。母と私は性格がよく似ていて、自分の意見を貫き通そうとする外から見れば自己中心的な考えを持っています。そんな二人が、朝から激しい喧嘩を始め、延長戦でその日の晩まで喧嘩が続いていたら、さすがの兄も嫌だったに違いありません。私と喧嘩してヒートアップした母は、その燃え尽きない怒りやストレスを父や兄に当て始めたこともありました。そうなれば、兄の嫌気は倍増することでしょう。そんな日が一週間に一度は必ず訪れるようになって、やがて兄は私と母の喧嘩に対して、嫌気というものも消え、関心さえ無くなりました。母と私のことなど、どうでもよくなってしまったのです。私も段々兄との関係の悪化について、「もうこうなってからでは遅い。」と自らT家の兄妹関係にピリオドを打ってしまいました。

しかし、私も中学三年生になり心身共に成長してくると、「このままで本当に良いのだろうか。」「お父さん、お母さんは少なくとも私達の凍結した関係に良い思いをしていないはず」と思うようになりました。兄から接し方を変えてくれるまで待っていた今までの私は、誰かがやり始めてくれるまで、面倒くさがって、結局自分からは何もできていないという臆病者でした。「お兄ちゃんが変わらないのなら、私から変えてみせる。」と心に決めても、なかなか行動に移すことはできませんでした。ある日、新しい英和辞典が授業で必要になると聞いた時、チャンスが来たと思いました。自分の力で「英語の辞書貸してくれる。」と言えるかもしれない。兄の「いいよ。」という顔が頭に浮かんできていました。しかし、実際兄の部屋の前に立つと、部屋を開けるノックでさえ、怖くなってガクガクしてしまいました。「怒られたら、どうしよう。」「断られたら、何と言えば良いのだろう。」頭の中はそんな不安な気持ちでいっぱいになってしまったのです。結局、母に兄を説得するように私は頼みました。母が兄を説得している様子を私は隣の部屋で聞いていました。その内容は、私が以前まで持っていた考えをくつがえすものでした。「英語の辞書一つ借りることも自分の口で言えないんだったら、貸したくもなくなるし、いつまでもこんなことを

しているんだったらこの先も妹には何もしてあげられない。」兄の言っている通りでした。自分から真正面から兄に向き合おうとせず、母を利用してまるで伝言ゲームのように間接的に兄に伝えようとしていました。これこそが今、私が最も改善すべきところだったのでした。しっかりと兄と面と向かって自分の力で話すこと。まず、私はここから始めなければならないと思います。ですが、私はいまだにそれができていません。兄とは趣味も好きなアーティストも一緒で話したいことは沢山あるのに行動に移すことができないのがもどかしく、とても悔しいです。

今回の感話のテーマの中に「兄弟との絆」というフレーズがありました。私は最初、「私達に絆なんかある訳がない」と思ってしまっていました。この感話を通じて絆というものは、お互いが向き合って信頼し合える関係になった時に初めて生まれるのではないかと思いました。これからは兄と兄妹としてちゃんと向き合って、いつか兄と素直な自分で話したいです。